

を再評価した。

対象は過去 9 年間に当院で経験した前立腺癌患者 191 例であり、治療は抗男性ホルモン療法を中心とした治療を施行していた。

どの腫瘍マーカーでも 10 ng/ml 以上では骨転移を有する率が高くなっていたが、10 ng/ml 以下では PSA (prostate specific antigen) 値が最も骨転移率とよく相関していた。腫瘍マーカー値での Positive Predictive Value と Negative Predictive Value を求めた表からも転移の判定は PSA が最もすぐれていた。

前立腺癌の病勢診断には腫瘍マーカーの中では PSA 値が最も信頼できた。10 ng/ml 以上なら癌を強く疑い、22 ng/ml 以上なら骨転移を強く疑えた。しかし、骨転移を完全に PSA 値から判定することは不可能であり、治療前の骨シンチグラフィはなお臨床的に必要と考えられた。

15. アマレックス MAB FT₃ による血中 FT₃ 測定法の検討

佐藤 龍次 原 秀雄 伴 良雄
谷山 松雄 長倉 穂積 海原 正博
杉田 江里 伴 良行 (昭和大・三内)

血中アルブミン濃度の影響を受けにくい測定法が開発されたので報告する。対象は、健常者 (H) 163 例、バセドウ病患者 (G) 98 例、甲状腺機能低下症患者 (H) 29 例、正常妊娠 75 例、TBG 増加および減少症患者 13 例、抗 T₃ 自己抗体患者 8 例、非甲状腺疾患 (NTI と略) は癌患者 38 例、肝疾患患者 24 例、肺炎患者 15 例、心疾患患者 25 例、糖尿病患者 29 例、腎疾患患者 11 例を用いた。37°C 30 分のインキュベーション時間で測定可能、再現性の CV 7.7% 以下。Albumin, oleate, TG, PL, IgG, Hb, Bilirubin, Glutathione 添加による測定値への影響はなかった。血中 FT₃ 濃度は N で 2.62~4.4、未治療 G で 5.8 以上、未治療 H では 2.1 pg/ml 以下と N との分離は良好。正常妊娠は妊娠の全経過で正常範囲、NTI は正常範囲内で、Albumin 濃度との相関もなかった。結論：本法はアルブミン濃度および抗 T₃ 自己抗体の影響が少ないことから、臨床应用到有用な測定法であると考えられた。

16. ^{99m}Tc-MIBI scan による透析患者の副甲状腺腫局在診断

小池 繁臣 竹林 茂生 西村 潤一
(横浜市立港湾病院・放)
松原 升 (横浜市大・放)

最近、^{99m}Tc-MIBI を使った副甲状腺の描出が行われてきている。今回われわれは、^{99m}Tc-MIBI を用いて慢性透析患者 7 人について副甲状腺 (過形成) の部位および大きさを MRI と超音波断層を用いて比較した。その結果、副甲状腺過形成は early, delayed の集積増加を認めるが、とくに delayed image では正常甲状腺と比較して明らかに wash-out が低く、その描出に有用であると思われた。また、検出可能な副甲状腺は 15 mm 以上と超音波断層 (・MRI) に比較して優れてはいないが、エタノール注入後などの機能の有無の評価には優れているものと思われた。

17. 甲状腺内に埋没した上皮小体腫瘍の一例

福光 延吉 大島 統男 菊池 善郎
伴 茂之 白井 辰夫 古井 滋
安河内 浩 (帝京大・放)

症例は 55 歳の女性で、尿路結石、高 Ca 血症を認めた。上皮小体機能亢進症が疑われ、CT, エコー、²⁰¹Tl-^{99m}Tc シンチグラフィを行った。シンチグラフィでは、甲状腺右葉にサブトラクションを認めた。手術が施行され、甲状腺内に埋没した上皮小体腫瘍が確認された。サブトラクションシンチグラフィで甲状腺内に強い集積を示した場合、甲状腺腫瘍と甲状腺内に埋没した上皮小体腫瘍鑑別は難しい。両者の鑑別は臨床症状、生化学データと合わせて総合的に診断する必要がある。

18. 甲状腺癌転移巣における ¹³¹I-Na と ^{99m}Tc-MIBI 集積の検討

小林 雅夫 最上 拓児 内山 真幸
守谷 悦男 森 豊 川上 憲司
(慈恵医大・放)
浅原 朗 (JR 東京総合病院)

甲状腺癌両葉全摘後症例の follow up に対し、^{99m}Tc-